

ラス・ピラス遺跡のモザイク状石彫（人物像）復元

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 平尾, 雅代 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/40173

ラス・ピラス遺跡のモザイク状石彫（人物像）復元

金沢大学大学院人間社会環境研究科博士後期課程 1年

平尾雅代

要旨

マヤ南東地域のコパン遺跡では、19世紀終わり頃から本格的な調査が始まり、考古学、碑文学、図像学など多分野の研究が集中的に行われ、マヤ研究の中心を成した。

特に南東マヤ地域で見られる特徴として、建造物にモザイク状の石彫彫刻を装飾している点がある。コパンでは、1985年からバーバラ・ファッシュ氏によって始まった「コパン・モザイク石彫プロジェクト」によって、多くのモザイク石彫が復元された。その結果、建物の機能やモチーフの意味、建造物を所有している人物の職業や官職、コパンの階層など多くの示唆を与えた。

しかし、モザイク石彫研究はコパンのみを対象とし、コパン周縁の地方センターのモザイク石彫については研究の目が向けられてこなかった。また、図像学の視点に立ったモチーフ解釈に注力されてきたため、考古学的な根拠に基づく解釈や、復元そのものの重要性について着目する研究はされてこなかった。発掘調査報告書や論文において、簡単な出土状況図と復元図が掲載されているものもあるが、出土位置と復元位置の関係性を明示しているものはなく、参考や比較する上で限界がある。

筆者は、コパンだけでなく南東マヤ地域におけるモザイク石彫の広がりや技術、モチーフの相違・変化を解明することで、社会の変化を捉えることができると考える。

そこで本論では、その足掛かりとして、筆者が参加した南東マヤ地域の地方センターであるラス・ピラス遺跡発掘調査で一括出土したモザイク石彫を資料として使用し、実際に再復元を行う。そして本再復元では、出土地点と復元位置の関係性を明示し、参考・比較可能な資料を本論で提示することを目的としている。

キーワード

図像学、モザイク石彫、復元

The Restoration of Mosaic Sculpture (Personage) of Las Pilas Ruins

HIRAO Masayo

Abstract

The study of iconography in the southeastern Maya area has been focused around the Copan ruins until now. In particular, the Copan Mosaic Project that was started in 1985 by Barbara and William Fash restored the mosaic sculptures that adorned the facade of the building. With this project, imagery motifs, the functions of each building, and the world views and hierarchy of the Copan Maya in regional politics have been suggested, while very important research results were also announced.

However, there is no published documentation about the details for justifying the restoration of this project (for example, it lacks documentation showing the positional relationship between the restored and the collapsed positions). For this reason, it is difficult for others to examine the reasons why they were restored as such.

In this paper, I re-examine the mosaic sculptures excavated in the Las Pilas archaeological site in Honduras, presenting the relationship between the restored and the collapsed positions of the main sculptures, and I intend to make a comparison of mosaic sculptures in various sites in the southeastern Maya area.

Keywords

iconography, mosaic sculpture, restoration.

1. はじめに

本論文で研究資料とするラス・ピラス遺跡を包括するラ・エントラーダ地域は、グアテマラとの国境に近いホンジュラス共和国の東端に位置する(図1)。

この地域は古代マヤ文明地域において南東部に位置し、紀元5世紀初頭に創始されたコパン王朝を中心にラス・ピラスなどの周縁の地方セン

ター¹⁾と主従関係にあったと考えられている(中村1997:164)。

南東マヤ地域の中心都市であるコパンでは、建造物の壁面を装飾していた多くのモザイク状石彫²⁾(以降、石彫と呼ぶ)が発見され、マヤ研究における図像学研究の中心的役割を担ってきた。これら石彫は実際に復元され博物館に展示されている。コパンと同様に地方センターでも様々な石彫の存在は確認されているが、集中発掘が行われ復元可能な状況にあるのは、リオ・アマリージョ(図1)とラス・ピラス(図1)だけというのが現状である。

コパンでは、発掘調査によって建造物の装飾方法が大きく2段階に分けられることが分かっている。まずコパン王朝開始の5世紀前半から7世紀前半頃にかけては、建造物の周りを漆喰レリーフで装飾されていたのに対し、それ以降から建造物が建てられなくなるまでの9世紀前半にはモザイク状石彫を用いた装飾へと変化している(Fash 1996:134.; Martin and Grube 2008:213)。

コパン周縁の地方センターで確認されている石彫は、明確な作成・使用時期は分かっていない。ただ、複合建造物の土器あるいはC14測定による各建造シーケンスの建造時期、表現されるモチーフ、コパンと地方センターの関係の変化などから、少なくとも8世紀後半以降に作成され、装飾されていたのではないかと推測されている(中村1997:171)。



図1：南東マヤ地域(上山2000)

特にマヤの建造物は、古い建造物を基礎にして増改築を繰り返しているため、中心都市であるコパンですら古い建造物の上部構造や装飾が残存する例は極めて少ない。地方センターでは古い時代の石彫を発見する事は非常に難しいかもしれない。

以上の理由からコパンで復元された石彫の大半は、最終居住段階のものが殆どである為、地方センターで確認されている石彫復元をするには、モチーフ自体の同定やモチーフの配置などの点で非常に参考になる。

しかし、出土状況と復元位置の関係について書かれた報告書や論文などが無い為、地方センターの石彫復元や比較研究をするには限界がある。

例えば、コパンの居住区域にある9M-22Aグループにある建造物165番の石彫復元では、ジェームズ・シーヒ氏の論文で見られる復元 (Sheehy 1991: 8) とパーバラ・ファーシュ氏の復元 (Fash 2011: 138) は異なっている (図2) が、この差異の理由についてはどこにも記されていない。こういった復元における差異は出土地点の再考によってもたらされたものなのか、他のモチーフからの転用に因るものなのか、非常に重要な問題である。しかし、今日までの復元はモチーフに表象される意味を解釈する事に注力されており、



図2：建造物165番の復元比較

復元過程については重きをおかれて来なかったと言っても過言ではない。

そこで本稿は、1995年から1997年にかけて実施された、中村誠一氏を団長とするラス・ピラス遺跡 (図3) 発掘調査において、一括出土した石彫研究の許可を得て、出土地点と再復元位置の関係を本論で明らかにすることで、今後の地方センターの石彫研究の為の比較資料の基盤とする事を目的とする。

2. ラス・ピラス遺跡考古学プロジェクトと一括石彫の発見

1983年から1990年まで政府開発援助 (ODA) 機関の一つである国際協力事業団 (JICA: 現・国際協力機構) と青年海外協力隊事務局を主体とし、中村誠一氏を団長とするラ・エントラーダ考古学プロジェクト第1フェーズが実施された。

ラ・エントラーダ地域内の踏査が行われ、遺跡平面図などが作成された。ラス・ピラス遺跡は、この時に初めて確認された遺跡で、踏査によって3つの文字ブロックと10点の石彫が確認されている (Nakamura et al. 1991)。

本格的なラス・ピラス遺跡発掘調査は、1994年から1997年にかけて中村誠一氏を団長として実施された。本発掘調査は、遺跡の中心グループにある建造物2番 (図3) を中心に実施され、建造物の壁面を装飾していた石彫群が一度に崩落した状

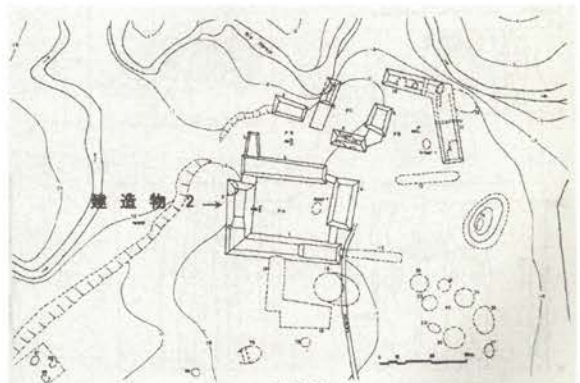


図3：ラス・ピラス遺跡中心部 (Nakamura et. al. 1991)

態で発見された(中村 1997: 167)。これらの石彫には人物の頭部や腕、足などが確認されており、明らかに人物像を表現した石彫を主としている事が分かった。

これら石彫集中の回収は、主にマヤ図像研究者のバーバラ・ファーシュ氏とカール・タウベ氏の指揮の元1995年に行われ、翌年、バーバラ・ファーシュ氏によって、その復元が暫定的に試みられた。しかし、氏の復元作業はボランティア精神に基づく協力であり、時間の制約がある中で行われ、その時点で出土している石彫を用いて可能な範囲でのモチーフ復元を優先された点や、この石彫の一括出土以降も多くの石彫が確認されている点などから、氏の復元を参考にしてこれらの石彫を再考する必要がある。

筆者は、この調査に1996年から参加している為、石彫群の発見や取り上げには参加していないが、中村氏の許可を得てバーバラ・ファーシュ氏による復元作業の場に立ち会う機会を得ることができた。次に石彫の復元について考察する。

3. ラス・ピラス遺跡の石彫復元

先に述べた通りラス・ピラス遺跡出土の石彫群には人物を表現したものが主として含まれている事から、実際に復元をする前に、まず、コパンでの人物像の石彫復元の事例を見ていく事にする。

コパンでは人物像を表現する際には、写真1の様に「人物そのもの」と「人物の周りを装飾するもの」で構成されている。「人物そのもの」は、頭部、耳飾り(頭部に既に付随している場合がある)、胸部、腹部(胸部と一体になっている場合が多い)、腰巻き(腹部と一体になっている場合が多い)、腰巻きから延びる前垂れ、腕、手、足があり、これらは、いくつかの部分がまとめて一つの石で表現される場合もあれば、そうでなく個々に表現される場合もある。

「人物の周りを装飾するもの」は、頭飾り(色々な種類のモンスター³⁾像で神を模す)、頭飾りのモンスター像に付随する耳飾り(モンスター像と



写真1: 例) コパン9N-82の人物像

一体化している場合がある)、1段もしくは2段の羽根飾り、台座などが大きく分けて使用される。

次に、まずバーバラ・ファーシュ氏によるラス・ピラス出土の石彫の復元を見ていく事にする。写真2は石彫が一括出土した現場での写真で、向かって右側が建造物2番の背面部分になる。写真2の一括出土状況のデータとしては、現場写真、石彫の一括出土状況の平面図、バーバラ・ファーシュ氏による取り上げ作業プロセスにおいて撮影されたポラロイド写真とスケッチが残されている。

氏が暫定復元をされた同様の状況下で氏の復元を考察するため、扱うデータは、「写真2などの出土状況写真」「一括出土状況の平面図」、「バーバ



写真2: 石彫の一括出土状況(中村誠一氏撮影)

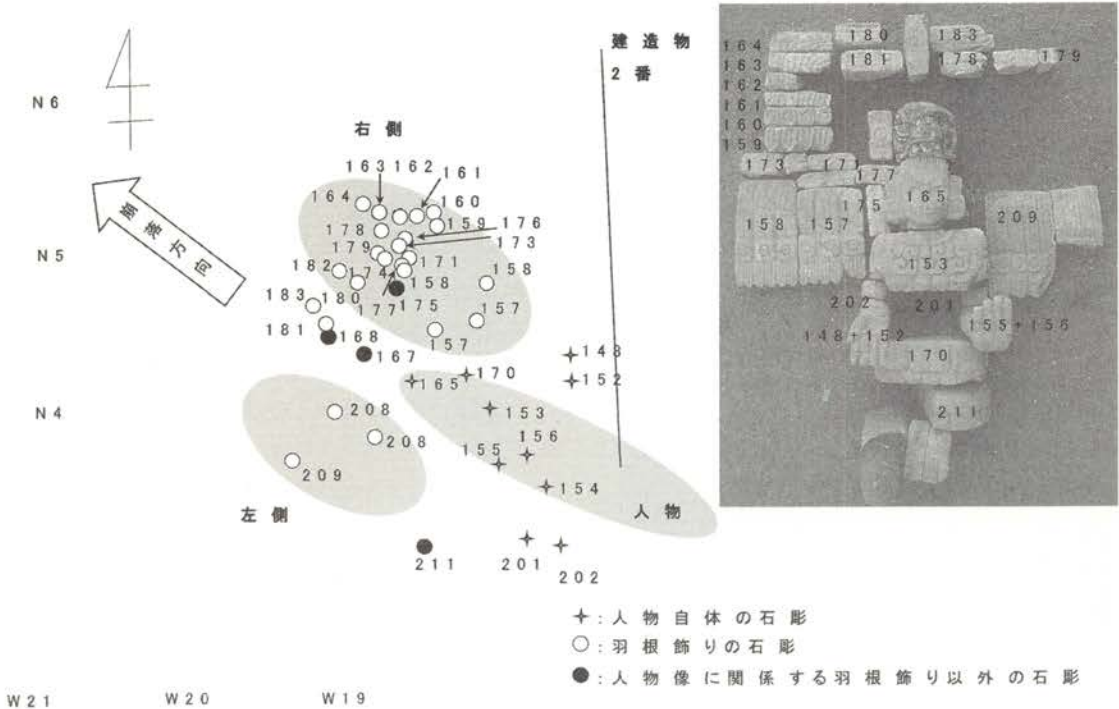


図4：人物像と人物像に関する石彫

ラ・ファッシュ氏の写真とスケッチ」とする。これらデータの相関関係を分かり易く図4に示した。

但し、現場の平面図を元に図を起こしているため、大きな石彫であれば50cm以上はあるが、中心部分に黒点を落としていたため、実際には重なりあって出土しているため、図4では離れて出土している様に見えるので、その点は注意が必要である。

図上の番号は、石彫を取り上げた順番に付けられた石彫番号である。

建造物の壁面部分が外に向かって崩壊した場合、壁面の高い所にある物は下に位置する物に比べ、より遠くに落ちると考えられる。二次的要因（崩壊後に人によって移動、あるいは崩壊後に洪水などの自然的要因による移動など）による移動がない場合、図4においてもそのように考えられる。

バーバラ・ファッシュ氏による一括出土した石彫の暫定復元は、写真3のとおりである。

特徴としては、

- ①羽根飾りが2段あり、その上段は下段に比べて幅が狭い。
- ②胸部と腰巻き部分との間に隙間を空けている。
- ③腰巻き部分に石彫を2段使用し、かなり幅のある腰巻きが想定されている。
- ④羽根飾りの起点となっているゴザのモチーフと頭飾りの間に空間を設けている。
などが挙げられる。

復元写真3の個々の石彫出土位置を図4に見た時、グレーの楕円で囲んでいる様に、人物像の石彫を中心に左右の羽根飾りが崩落しているのが分かる。図4で言う右側とは、写真3に記している右側の事である。

写真2の出土した石の方向が一定の方向(北西)を向いている点や、出土した石彫のパーツ：頭、胸部、羽根飾りなどの共伴関係(図4)などから、先に述べた通り、ラス・ピラスの石彫群の集中出土は二次的要因による移動は受けていない可能性が高いと考えられる。また、写真3の上部に位置する物は下部に位置する物に比べ、建造物からよ



写真3：バーバラ・ファッシュ氏による復元
(中村 1997)

り遠くへ崩落している場合が多く、特に右側の羽根飾りNo. 159~No. 164 (図4)はその状態が顕著に現れている。

以上のバーバラ・ファッシュ氏の復元を参考に、出土地点との整合性を考慮しながら再復元を行っていく事にする。

バーバラ・ファッシュ氏の復元を考察した際に使用したデータに加え、一括出土前後に周辺から出土した石彫の測点も使用する事とする。

これらの測点を加えた図を図5に起こし、コパン遺跡で復元されている石彫や石碑などのモチーフを参考にして、バーバラ・ファッシュ氏の復元と比較しながら復元の再考を行うものとする。

3.1. 人物自体の石彫

既にバーバラ・ファッシュ氏の暫定復元の考察で見たように、人物自体に関する石彫は、建造

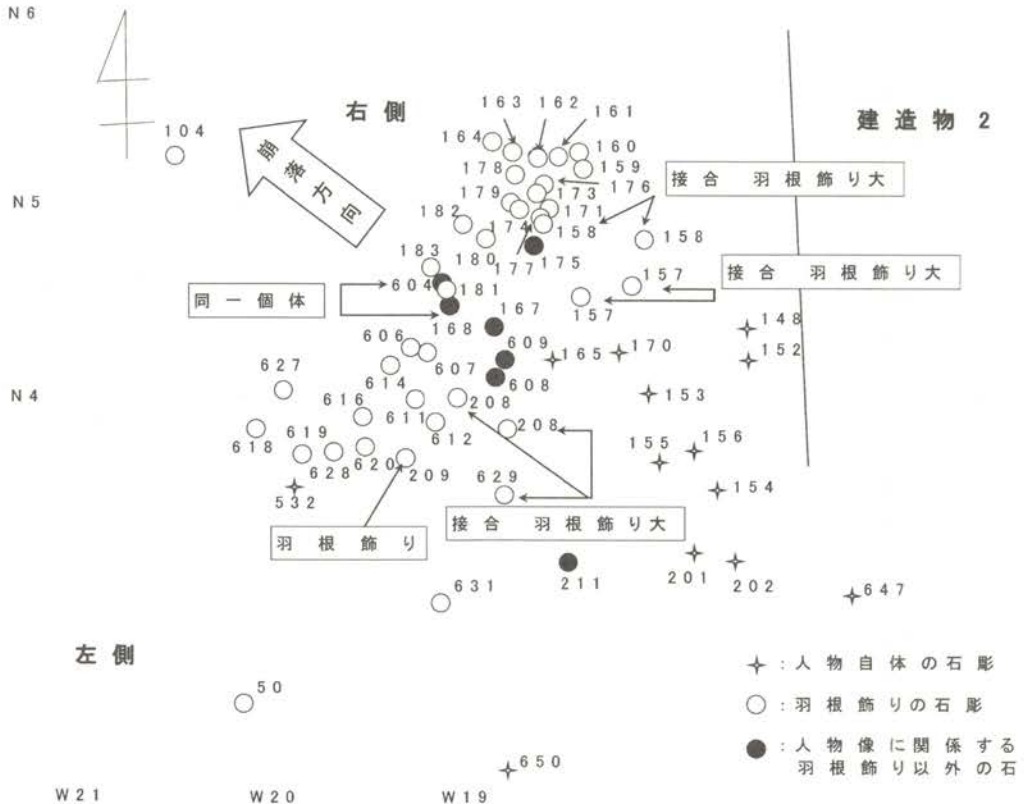


図5：人物像と人物像に関する石彫

物の比較的近くから出土していることがわかる。これらの人物自体の石彫だけに焦点を当てて図6を作成し、それぞれの出土関係を確認する。

図6からは、高い位置に裝飾されていた頭部No.165は下位に配されていた胸部No.153よりも、建造物から遠くに崩落している。つまり、高い所に裝飾されていた石彫は建造物からより遠くへ、低い所の裝飾は建造物の近くに崩落していることが分かる。

図6の右手（No.148とNo.152）と左手（No.155とNo.156）は頭部～胸部のラインを境にきれいに右側と左側に分かれている。これらについては写真3・図4のバーバラ・ファッシュ氏の復元と同じである。

足については1本（図6：No.154, No.532, No.647）しか確認されなかったため、左右どちらに位置するのか分からない。しかし、図6の体の中心線や左右両手の出土位置から考えると、左腕の近くから出土していることから、左足の可能性があ

ると考えられ、バーバラ・ファッシュ氏の復元とは異なる（写真3・図4の足石彫には足先部分が不足しているが、この時点ではまだ未発見であったためである）。

そして特筆すべきは、同一個体の足の石彫（図6：No.154, No.532, No.647）の出土距離についてである。それぞれの破片は約3m離れて確認されており、崩落の衝撃で石が3つに砕け飛んだと推察される。つまり、3m離れた場所から出土した個体であっても、同一個体の可能性があるという事である。腰巻から伸びる前垂れ（No.650）についても、同様の現象が起きた可能性がある。本来、前垂れは両足の間か、腰巻きの付近から出土するべきであるが、実際には、これらの石彫から約2m以上離れた所から見つかっている。この前垂れ（図6：No.650）をよく観察してみると、壁面に埋め込まれていたであろう部分が折れて無くなっている事に気付く。これは、足と同様に崩落の衝撃で、それぞれが砕け飛んだ可能性が高いの

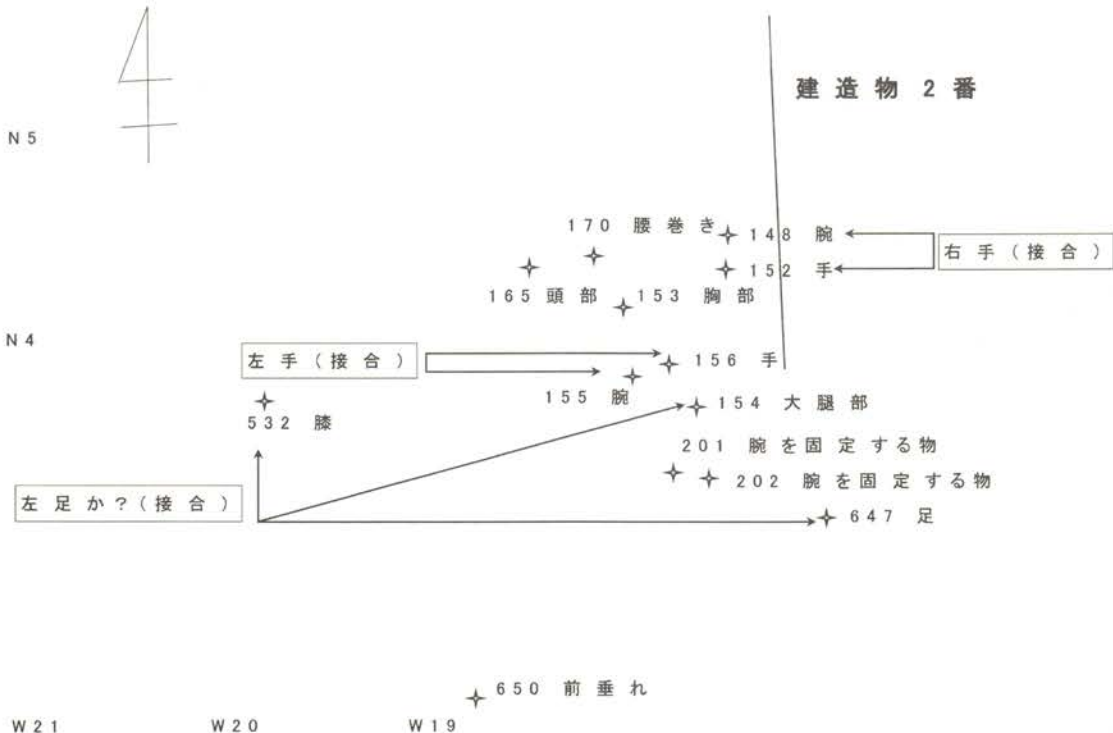


図6：人物自体の石彫出土位置

ではないかと推測される。本発掘では、彫刻が施されていると確認できる石を主に取り上げているため、前垂れの折れて無くなっている部分（壁に埋め込まれる部分）が仮に一括出土の中にあつたとしても、復元不可能な石くれと判断されてしまった可能性が高い。あくまでも想像の域を脱しないが、その可能性は否定できない。

また、No. 201とNo. 202については、バーバラ・ファーシュ氏の腕と肩をつなぐ部分であるという考えを踏襲する。これらは、近距離で出土しているため、どちらが左右に位置していたのかは不明である。ここでは、暫定的にNo. 202を右側として復元する。

3.2. 人物像に関係する装飾

次に、図5に表した羽根飾りを○、それ以外の装飾（頭飾り、耳飾り、台座）を●としたそれぞれの関係について考察する。

【頭飾り】

この図の中には、頭飾りが確認されていないが、この石彫の集中発掘時に出た廃棄用の石くれの山の中からバーバラ・ファーシュ氏によって復元された「モンスター頭飾り」が1体存在する。実際の崩落位置は不明だが、この人物像に関係するのはほぼ間違いないと言える。この頭飾りには耳飾りが付いていない。但し、写真3・図4の復元で使用されている頭飾りは、氏が確認した石彫が未修復であったため、類似の石彫を暫定的に配置したものである。

【耳飾り】

●のNo. 167とNo. 609は同じモチーフで、逆さアハウと、二重円から伸びるトウモロコシの穂を表したと思われる耳飾りである。これは人物の頭部には耳飾りが付随しているため、上述した「モンスター頭飾り」の耳飾りと推察される。出土状況から頭飾りの右側にNo. 167、左側にNo. 609が配されていたのではないと思われる。バーバラ・ファーシュ氏のモチーフの配置とは同じだが、筆者は一括出土した石彫を使用している。

【組紐状モチーフ】

No. 175とNo. 608は同じ組紐状のモチーフである。頭飾りのモンスターの耳飾りと同じ高さ且つ近距離から出土しており、モンスターの耳飾りと羽根飾りをつなげる部位を成していたのかもしれないが、コパンの8N-66S中央の人物像の様に、人物の顔の横に配される場合がある。全体を復元する際の配置関係などから、後に考察する事とする。但し、図5の出土状況からNo. 175は右側、No. 608は左側に配されていたと考えられる。

3.3. 羽根飾り

図4を用いて、バーバラ・ファーシュ氏の暫定復元の再考の折に確認したように崩落の一定方向性（北西）がある事や、人物像を中心に左右2本の腕の崩落位置などから、羽根飾りもある程度左右にまとまって崩落していると考えられる。

コパンでは人物像の羽根飾りの表現方法には2種類あり、写真1の様に2段に組み合わせたと、1段のみの装飾方法がある。

写真3のバーバラ・ファーシュ氏の羽根飾りの復元は、羽根飾りを2段配しており、上段が下段に比べて幅が狭い。

図5の配置を見てみると、人物像を中心に羽根飾りを構成する大きな石彫が、左右それぞれ2点ずつと、羽根飾りを構成する小さな石彫が出土している。大きな石彫は建造物2番の近くから出土しており、それ以外の小さな羽根飾り石彫は建造物からより離れた場所から出土している。このことから、大きな石彫で構成される羽根飾りは建造物の下の方に配され、羽根飾りを構成する小さな石彫はより高い位置に装飾されていたと推測される。つまり、ラス・ピラスでは2段の羽根飾りの装飾方法を用いていたと考えられ、バーバラ・ファーシュ氏の上下段での復元は妥当と考えられる。

詳細については、バーバラ・ファーシュ氏のボラロイド写真と、それを基に出土分布を示した図7を参考に考察する。

羽根飾り右側部分のNo. 164～No. 159（図4、図5）までは、順番に並んで出土している。図7の

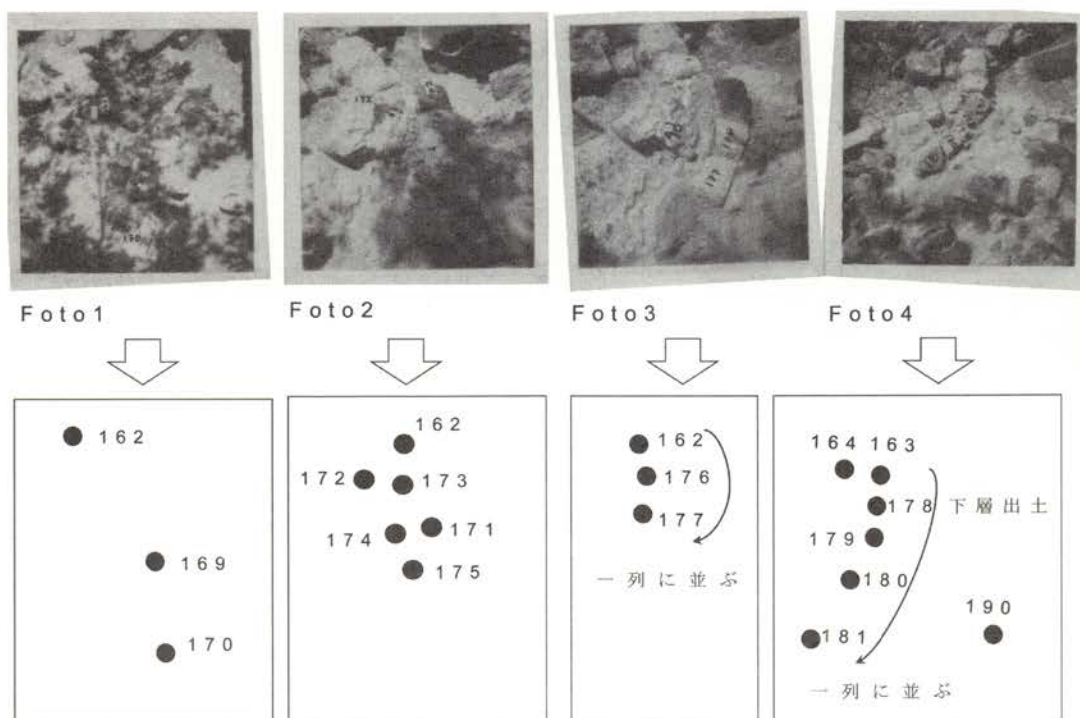


図7：バーバラ・ファッシュ氏によるポラロイド写真

Foto 3では、各石彫は横一列に出土、Foto 4ではNo. 163からNo. 181までが横一列に並んで出土しているが、No. 178は両端の石彫（No. 163とNo. 179）の真下から少しずれた状態で出土しており、この列ではなく他のものと並ぶ可能性を念頭に置く必要がある。

図4の羽根飾り左側部分のNo. 611とNo. 612（図5）は下段の羽根飾りを構成する大きな石彫の近くから出土しており、羽根飾りの模様を基に復元した。

アハウとゴザ状のモチーフ（No. 604とNo. 168）石彫は頭部から少し離れて確認されており（図5）、頭部より上位に配置されていたと考えられる。また、他地点からも類似した形状の石彫が2点出土しており、No. 604とNo. 168は同一個体の可能性が高いと思われる。耳飾りや頭部の出土関係から考えて、バーバラ・ファッシュ氏復元（写真3）同様に頭飾りの上に装飾されていたと推測される。コパンでも10L-32（写真5）で見られるような装飾方法である。

この様に、コパンの事例や各モチーフの出土位置などを考察し、実際に復元を行った（写真4）。次に復元に際しての補足説明を述べる。

【上段の羽根飾り】

写真4の様に、上段の羽根飾りと下段の羽根飾りの間（■部分）に空間を開けている。これは、羽根飾りの模様にかかる場所が大きい。例えば、右側羽根飾りNo. 176は下から立ち上がる羽根の線

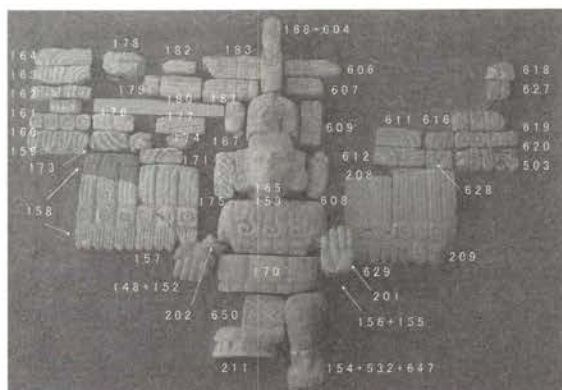
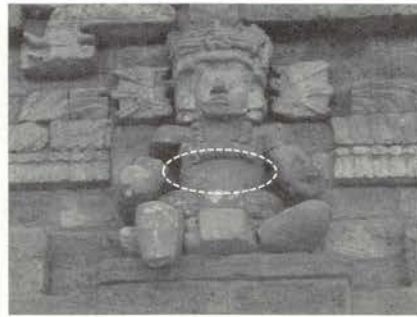


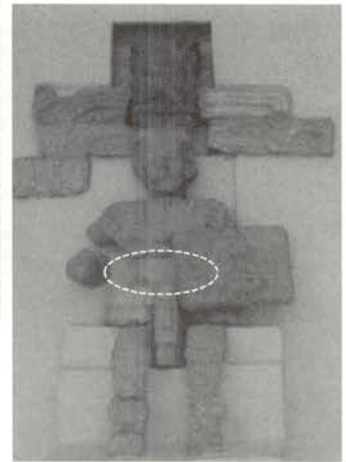
写真4：ラス・ピラスの人物像復元



9N-82



10L-32



10L-16

写真5：コバンの人物像復元の事例

を表しているが、これに続くモチーフが発見されていない。現在コバンヤラ・エントラダ地域で確認されている立ち上がる羽根飾りを持つ装飾の中で、その先端部分を表現していないものはない。ビーズ様の飾りを付けたものや、羽根そのものだけのシャープな先端を表現したもの（写真5の9N-82）など、表現方法は色々あるが先端部分は必ず表現されている。

Na 178はビーズ様の二重円のデザインが見られるが、Na 163とNa 179より下層から出土したことから、それらよりも高い位置に装飾されていたのではないかと推察される。と言うのも、Na 178の模様はNa 163、Na 179の模様と全く合致しないからである。仮にヨコではなく、タテに嵌め込まれていたとして、Na 176の立ち上がる羽根をNa 178のビーズ様の模様で留めたと仮定する。立ち上がる羽根（Na 176）の幅とビーズ様（Na 178）の幅が異なり、ビーズ様が横にズレて、2本の羽根を模した深い線刻が大きくズレてしまう。また、ビーズ様（Na 178）の石彫は線刻のある化粧面が破損しているが、側面の成形面は残存していることから、元々の化粧面の大きさは現存状態と大きく変わらないのではないかと考えられる。つまり、この石彫には羽根の先端部分は線刻されていた可能性は低い。先端部分を表現するためには、別の石彫を配する必要があるが、そのスペースは

なく、そういった先端部分の石彫も出土していない。

出土状況だけを考慮すれば上段と下段を隙間なく付けるべきなのかもしれないが、この様な模様の不自然さを解決できないことから、崩落の際に粉砕した石彫の可能性も考慮して、1段分の空間（■部分）を開けることとした。

以上の様に羽根飾りはバーバラ・ファーシュ氏の復元とは、やや異なる結果となった。上段の羽根飾りは下段のものよりも幅が広く、バーバラ・ファーシュ氏が想定したよりもダイナミックな羽根飾りを有していた事が分かった。

【胸部と腰巻き】

次に胸部と腰巻き部分について、考察する。

コバンの事例（写真5）を見ると、胸飾りで飾った胸部と腰巻きの間には必ず剥き出しの地肌部分（胴部）が表現される。そのため、ラス・ピラスにおいてもその様に表現されている可能性があると考え、この部分にあたる石彫を探した。しかし、この一括出土した石彫の中にはこの部分にあたる石彫は全く確認されなかった。よって、この人物像の胸部と腰巻きは、地肌部分なく直接的に上下を付けて装飾されていたと考えられる。

バーバラ・ファーシュ氏の復元では、胸部と腰巻きの間が空けられている（図3の②）のも、これが要因と思われる。

また、腰巻きの上下の配置については、コパンの10L-16（写真5）、石碑M、石碑N、石碑4に見られるように、腰巻きの下部に付けられる小形の巻貝などの装飾品をデフォルメしたものと考えられる。この事からコパンの10L-32（写真5）の様に、写真4の向きで配置した。バーバラ・ファーシュ氏の腰巻きの復元では、異なる石彫を2段重ねに配している（写真3の③）。

【手の配置】

手の配置については、バーバラ・ファーシュ氏やカール・タウベ氏の考えを踏襲している。

写真4のように、頭部に付随した耳飾りにもトゥモロコシの穂を模したものが彫られていることから、この人物自体、トゥモロコシ神と関係があると考えられ、コパン10L-22のトゥモロコシ神（写真6）の手の向きを参考している。実際のところは、壁面に埋め込まれる部分や腕自体が円筒状であるため、手の向きは全く分からないというのが現状である。



写真6：コパン10L-22トゥモロコシ神 (Baudez 1994)

【人物の足】

最後に足について考察する。

一括出土した石彫群、またはその前後に出土した石彫の中からは、この人物像の近辺で出土したものは3.1. で述べたように1本のみである。

他地点からは合計5本の足が出土しているの、これらとの関係を考察するため、人物像に関係する石彫の出土地点を図8に示した。（但し、建造物2番の図は部屋の配置を理解するため、それ以外の部分は省略している）

図8を見てみると、石彫の一括集中から出土した足は3部屋ある内の南側の部屋背面から出土している。他の足4本は中央と北側の部屋背面に集中して出土しているのが分かる。これらの足との距離は約8mあり、あまりにも離れすぎている。足4本の内、くるぶし下が残存しているNo. 542 (No. 38と同一個体)とNo. 600の足裏の大きさでは、31cmと34.5cmと大きさも随分異なっており、これらが左右の対を成すとは考え難い。また、これらの

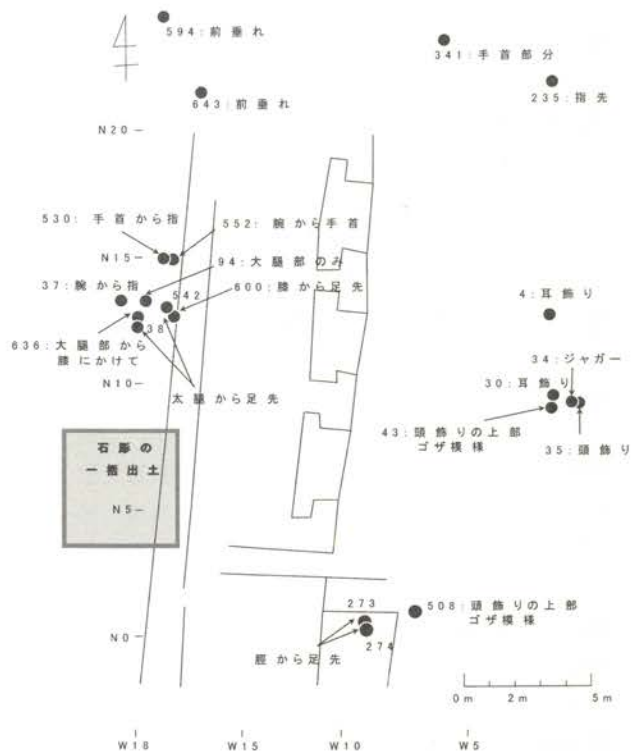


図8：人物に関する石彫の出土地点

足4本と共に腕や手も見つかっている状況などから、人物像が中央の部屋背面に1体と、北側の部屋背面に1体装飾されていた可能性がある。しかし、ここからは頭飾りや耳飾りなどの人物像に関係する石彫は見つかっていない。

残る足1本は、南側の部屋の斜め前から出土しており、その近くからは頭飾り上部に配されていたであろうゴザ模様の石彫が出土している。その他の数少ない人物像に関係する石彫の出土状況から、建造物正面に各部屋の上部にも人物像が嵌め込まれていた可能性が考えられる。

バーバラ・ファーシュ氏の復元(写真3)の足の配置は、右足となっている。しかし、出土地点等を考慮した場合、左足の可能性が高いという結論に達した。

4. おわりに

バーバラ・ファーシュ氏は、コパンにおいて、多くの石彫復元の実績を有する最も経験のある研究者である。そのバーバラ・ファーシュ氏の復元と筆者の復元において、最も大きく異なった点は、羽根飾りの幅、モチーフを構成する石彫の個数、人物の胴部である。

氏の復元はコパンの類例を基礎に於かれているため、コパン様の復元がされている。コパンで復元されている2段の羽根飾りを有する石彫の幅は、上下共に同じか、下段の幅がやや広い。ラス・ピラスの様に上段の幅が広く、下段を覆う様な復元は現時点では存在しない。

ラス・ピラスの羽根飾りを構成する石彫の個数は推定50点弱、コパンでは約その半分の点数を使用している。構成する石彫の点数が増えれば、それだけ復元が困難になる。

また、コパンでは胸部と腰巻き間の腹(地肌)部分は必ず表現されているが、ラス・ピラスでは表現されていないと考えられる。

コパンとも他の地方センターとも異なっているこの表現方法は何を意味しているのか。

ラス・ピラスの人物像は頭、胸、肘から手、腰

巻き、前垂れ、左右の足といった非常に細分化された石彫が使用されている。胴部が見つかっている地方センターの事例としては、エル・プエンテ、エル・セドラル、リオ・アマリージョが挙げられるが、これらの遺跡で見られる胴部は、コパン同様に胸部と腰巻き間の腹(地肌)部分が表現されている。

ラス・ピラスでは石彫が非常に細分化されている点や、他の地方センターとも異なる表現方法という点は、支配者の権力の大小に起因している可能性もあるのではないかと想像する。というのも、地方センターが独自性を主張しているのであれば、ラス・ピラス以外でも同様な表現方法を用いているはずだが、現時点では全く見つかっていない。コパンの彫刻表現との相違が、地方センターの独自性を示している可能性もあるだろうが、支配者の権力の大小の可能性も十分考えられる。

しかし、現段階では比較し得るほどの復元資料データが多くはないため、今後の調査に期待するところが大きく、本復元をこの地域の石彫復元の一指標とする。

文末ではあるが、本研究を実施する上で2013年8月から10月にかけて、金沢大学大学院からは「卓越した大学院拠点形成支援補助金」のご支援のおかげで、現地で研究を円滑に行う事ができた。また、主任担当教員である中村誠一先生、ホンジュラス共和国国立人類学歴史学研究所エル・プエンテ考古学公園職員の皆様、コパン考古学プロジェクトの皆様には多大なるご支援を頂き、重ねて感謝の意を表したい。

【注釈】

- 1) ゴードン・ウィリーの提唱している宗教的、行政的、経済的、社会的機能を果たしていたであろう、大きな建造物を含んだ建造物複合を社会単位とし

- て「センター」と位置付けている事にのっっている (Willey 1981: 391)。本論における地方センターとは、コパンと緩やかな主従関係にある地方の「センター」に対して地方センターとする。
- 2) 建造物を装飾するモチーフを構成するモザイク状の石のブロックのことを言う。ジクソーパズルを想像して頂くと分かりやすい。
- 3) マヤの図像学においてモンスターとは、動物と人間を組み合わせたような姿、あるいは、グロテスクな状態まで通常の姿を潰したような姿を言う。古代マヤ人たちは、自然界の現実の生き物と混同しないように、動物と人間の特徴を誇張表現し、両者をお互い合わせることによって超自然的な生物を創り出した。古代マヤ人によって創り出された超自然的な生物を指してモンスターと呼ぶ (Schele and Freidel 1990: 427)

【引用・参考文献】

- Baudez, Claude F., *Maya Sculpture of Copan: The Iconography*, University of Oklahoma press, 1994.
 "The Maya King's body, mirror of the universe", *RES*, 38, autumn, 2000.
- Fash, William L., et al., "The Hieroglyphic Stairway and Its Ancestors: Investigations of Copan Structure 10L-26", *Ancient Mesoamerica* Vol.3, No.1, 1992.
- Fash, Barbara W., "Visual communication in Classic Maya architecture", *RES*, 29/30, Willet, Gordon, 1996, p.134.
- Fash, Barbara W., "Late Classic Architectural Sculpture Themes in Copan", *Ancient Mesoamerica*, Vol.3, No.1, 1992.
- Fash, Barbara W., *The Copan Sculpture Museum: Ancient Maya Artistry in Stucco & Stone*, Peabody Museum Press, 2011, p.138.
- Fash, Barbara W., and Karla L. Davis-Salazar, "Copan Water Ritual and Management: Imagery and Sacred Place", in: Lucero, Lisa J., and Barbara W. Fash, eds., *Pre-Columbian Water Management: Ideology, Ritual, and Power*, The University of Arizona press, 2005.
- Fash, Barbara, et al., "Investigations of a Classic Maya Council House at Copan, Honduras", *Journal of Field Archaeology*, Vol.19, No.4, 1992.
- Hirao, Masayo, "Informe de Actividades: Reconstrucción de Escultura Mosaica de Las Pilas", Honduras: PROARCO-IHAH, 2013.
- Kubler, George, *The Louise and Walter Arnsberg collection: pre-Columbian sculpture*, Philadelphia Museum of Art, Vol.2, 1954.
- Longyear, John M., "Cultures and Peoples of the Southeastern Maya Frontier", Carnegie Institution of Washington, Division of Historical Research, 1947.
- Martin, Simon, and Nikolai Grube, *Chronicles of the Maya Kings and Queens: Deciphering the Dynasties of the Ancient Maya*, 2nd ed., Thames and Hudson, London, 2008, p.213.
- Miller, M. E., "Copan, Honduras: conference with a perished city", In: Benson, E. P. ed. *City-states of the Maya: art and architecture: a conference*, Rocky Mountain Institute for Pre-Columbian Studies, 1986.
- Miller, M. E., and K. Taube, *The God and Symbols of Ancient Mexico and The Maya: An Illustrated Dictionary of Mesoamerican Religion*, New York: Thames and Hudson, 1993.
- Morley, Sylvanus G., *The inscriptions at Copan*, Carnegie Institution of Washington, 1920.
- Nakamura, Seiichi, "Reconocimiento Arqueológico en Los Valles de La Venta y de La Florida", *YAXKIN*, Vol. X, No. 1, IHAH, 1987.
- "Proyecto Arqueológico La Entrada, Temporada de Campo, 1986-1987 Resultados Preliminares", *YAXKIN*, Vol. XI, No.2, IHAH, 1988.
- Nakamura, Seiichi, Kazuo Aoyama, and Eiji Uratsuji, eds., *Investigaciones Arqueológico en la Región de La Entrada*, Tomo 2, San Pedro Sula, Honduras: JOCV e IHAH, 1991, p.193.
- Schele, Linda, and Mary, E. Miller, *The Blood of Kings: Dynasty and Ritual in Maya Art*, Fort Worth, Tex.: Kimbell Art Museum, 1986.
- Schele, Linda, and Peter Mathews, *The Code of Kings: The Language of Seven Sacred Maya Temples and Tombs*, New York: Simon and Schuster, 1998.
- Schele, Linda, and David Freidel A., *Forest of Kings: Untold Story of the Ancient Maya*, New York:

- William Morrow and Company, 1990, p.427.
- Schortman, Edward M., and Seiichi Nakamura, "A Crisis of Identity: Late Classic Competition and Interaction on the Southeast Maya Periphery", *Latin American Antiquity*, Vol. 2, No. 4, 1991.
- Sharer, Robert J., Julia C. Miller, and Loa P. Traxler, "Evolution of Classic Period Architecture in The Eastern Acropolis, Copan", *Ancient Mesoamerica*, 3, 1992.
- Sheehy, James J., "Structure and Change in A Late Classic Maya Domestic Group at Copan, Honduras", *Ancient Mesoamerica*, 2, 1991, p.8.
- Strómsvik, Gustav, "Substela Caches and Stela Foundations at Copan and Quirigua", *Contributions to American Anthropology and History*, Vol. VII, No.37, 1942.
- Taube, Karl A., "Maya Low Land Settlement Patterns: A Summary Review" in *Lowland Maya Settlement Patterns*, ed., W. Ashmore, Albuquerque: University of New Mexico press, pp. 385-415, 1981.
- "Concepts of life, beauty, and paradise among the Classic Maya", *RES*, 45, 2004.
- "The Symbolism of Jade in Classic Maya Religion", *Ancient Mesoamerica*, 16, 2005.
- Triak, Aubrey S., "Temple XXII at Copan: with frontispiece, 15 plates, and 11 text-figures", *Contributions to American Anthropology and History*, Vol. 5, No. 24, 1939.
- Ueyama, Masayo, "Informe Preliminar de Investigación del Grupo M (el puente)", Honduras: IHAH, 2003.
- Wiley, Gordon, "Maya Lowland Settlement Patterns: A Summary Review", *Lowland Maya Settlement Patterns*, ed. Wendy Ashmore, University of New Mexico press, 1981, p. 391.
- Yde, Jens, "A Preliminary Report of the Tulane University-Danish National Museum Expedition to Central America 1945", *Maya Research* vol. 3, No. 1, 1936.
- 上山 雅代 『モザイク石彫から見たコパン王朝崩壊 -モザイク石彫に表現される共通概念-』, 埼玉大学大学院修士論文, 2000.
- 杓谷 茂樹 『ラス・ピラス遺跡建造物2番出土の石彫の調査・修復に関する報告書』, 古代マヤ文明ラス・ピラス遺跡の調査・修復プロジェクト, 1996.
- 寺崎 秀一郎 『ラス・ピラス遺跡建造物2番の調査 -活動報告書-』, 古代マヤ文明ラス・ピラス遺跡の調査・修復プロジェクト, 1996.
- 中村 誠一 『平成7年度渋沢研究助成金によるフィールド調査報告書』, 公益信託澁澤民族学振興基金, 1995.
- 『コパンおよびその周辺地域における調査・研究の現状と展望 -古典期マヤ文明の成立と終焉に関する問題点を中心に- (財団法人トヨタ財団平成6年度および7年度研究助成 中間報告書)』, 財団法人トヨタ財団, 1995.
- 『南東地域から見た古典期マヤ文明の崩壊』『ラテンアメリカ年報』17号, 日本ラテンアメリカ学会, 1997, pp. 164-171.
- 『古典期マヤの政治組織論序説 -南東地域からの再検討-』『文明の考古学: 貞末堯司先生古稀記念論集』海鳥社, 1998.
- 『周縁から見たマヤ文明 -古典期コパン国家の政治的ダイナミクス-』埼玉大学大学院修士論文, 1999.
- 『ホンジュラス、エル・プエンテ遺跡及びピラス・ピラス遺跡における保存修復の経緯、現状、問題点』『第5回国際文化財保存修復研究会報告書』, 東京国立文化財研究所国際文化財保存修復協力センター, 1999.
- 中村誠一, 青山和夫 「中米ホンジュラスにおける考古学調査 -ラ・エントラダ考古学プロジェクト紹介-」『考古学研究』第39巻, 第2号, 1992.